

目次

はじめに 1

1章 知識編

1.1 JF 日本語教育スタンダードとは	5
1.2 「JF スタンダードの木」を理解する	7
1.3 6つのレベルを理解する	12
1.4 Can-do を理解する	14
1.5 ポートフォリオを理解する	25

2章 実践編

2.1 コースをデザインする	39
(1) コースの方針、目標を考える	40
(2) 目標にあった学習内容を考える	41
(3) 学習成果の評価について考える	44
2.2 コースデザインに Can-do を使う	49
(1) 学習目標一覧と自己評価チェックリストを作る	49
(2) 話す力を測るための評価基準と評価シートを作る	55

参考資料・文献

参考資料 1	CEFR 共通参照レベル：自己評価表	68
参考資料 2	言語能力と言語活動のカテゴリー一覧	70
参考資料 3	Can-do のレベル別特徴一覧	72
参考資料 4	能力 Can-do 一覧	78
参考資料 5	共通参照レベル：話し言葉の質的側面	83
文献		84

【JF スタンダードご利用にあたっての免責について】

- 国際交流基金は、JF スタンダードの内容の正確性の確保に努めています。また、掲載する文書・写真・イラストその他各種コンテンツ等については、慎重に作成しておりますが、当基金がこれらの完全性を保証するものではありませんので、あらかじめご了承ください。
- JF スタンダードを利用してコースデザインやカリキュラム作成、試験作成や試験を行った場合、その正確性や有効性の責任はそれぞれの実施主体にあり、国際交流基金および欧州評議会は一切の責任を負いません。以上の内容をご理解頂いた上、ご利用ください。

はじめに

本書は、国際交流基金が「相互理解のための日本語」という理念のもと、2010年より公開しているJF日本語教育スタンダード(以下、JFスタンダード)の利用者のためのガイドブックです。国際交流基金では、海外に日本語を普及するにあたり、日本語のさらなる国際化を目指して、日本語教育のさまざまな基盤整備に取り組んできました。JFスタンダードは、この基盤整備の中心的な役割を担うものです。

価値観が多様化し、人と人との接触や交流が拡大していく現代社会においては、人間同士の相互理解の重要性がますます高まっています。言語によるコミュニケーションを通じて相互理解を深めていくためには、言語を使って何がどのようにできるかという課題遂行の能力と、さまざまな文化にふれることでいかに視野を広げ他者の文化を理解し尊重するかという異文化理解の能力が必要です。

JFスタンダードでは、まず、日本語を使って何がどのようにできるかという能力に重点を置き、日本語の熟達度のレベルを提示しました。また、学習過程を記録し保存し、それを振り返ることの大切さを提案しました。多種多様な日本語教育の現場が、いわば同じものさしを使うことで、世界中のどこで日本語を学んでいても / 教えていても、今自分が学んでいる / 教えているレベルがどこにあるかを知ることができるようになります。また、熟達度を評価し、言語的・文化的体験を記録し振り返ることによって、課題遂行の能力と異文化理解の能力を育成し評価することができます。進学や留学、就職や移住などで人が移動する際にも、それまでの学習成果や熟達度を正確に伝達できるようになります。『JF日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』は、このような教育実践に役立てていただくために作成しました。

JFスタンダードの開発は、これまでの多くの研究知見や教育実践の再検討から出発しましたが、そのとき以来、内外の教育関係者・機関からの助言や協力を得、現場で活用されてきました。ここに厚く御礼申し上げます。今後も、広く各地の現場の声を反映させることを通じ、JFスタンダードの内容の充実と利便性の向上を重ねてゆきたいと考えています。

グローバル化が進む世界において、JFスタンダードにより、学習者、教師のみならず、日本語によるコミュニケーションに関心のあるすべての人々が共通の基盤に立ち、日本語がより学びやすく、教えやすくなることを願っています。そして、JFスタンダードの有用性がより明確にされることを通じて、日本語教育がさらに発展し、国際相互理解が促進されることを願ってやみません。

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）

